札幌大学総合研究　第 8 号（2016 年 3 月）

〈講演〉

「北海道から挑戦する地域創生と国際貢献 ～道内包括連携自治体および JICA 事業海外フィールドを事例として」

西山　徳明

司会者：みなさんこんにちは。附属総合研究所の所長を務めておりますミスと申します。

今日は平成 27 年度の附属総合研究所の講演会として北海道大学観光学高等研究センターのセンター長である西山徳明先生にお越しいただきました。

先生の詳しいプロフィールはお手元にありますが，概して言いますと，地方の文化遺産，歴史遺産といったものを用いながらまちづくり，まち興し，そういったものに取り組んでこられた先生であります。

私も歴史学を専門としているものですから，大学の知見というものがどういうふうに実際の活動なりに活かせるのか，そういったおもしろいお話しが聞けるのではないかと楽しみにしています。まぁ，私が長々としゃべっても意味がありませんのでさっそく西山先生にお話をしていただければと思います。よろしくお願いいたします。

西山：ありがとうございます。ご紹介いただきました北海道大学の観光学高等研究センターセンター長の西山です。

今日は若い人を中心にこんなにたくさん集まって頂き大変うれしく思います。

これから面白い話，真面目な話，難しい話いろいろ含めて 80 分弱話をさせていただきますが，せっかく若い人がたくさん集まって来てくれているので，まず冒頭で私たち観光学高等研究センター（以下，CATS）がこの 4 年間，一生懸命やっている観光ツアー造成という，ほとんどみなさんピンとこないと思いますが，みなさんが海外の観光地に行くと，そこでだいたいパッケージツアーだったら決められたメニューを回るわけですが，そのメニューのひとつをひとつの商品と考えて，その商品を作ることをツアー商品造成と言います。

ちなみにうちのセンターはCenter for Advanced Tourism Studiesを略してCATSキャッツと言います。ミュージカルのCATSと綴りは一緒で中身は全然違いますけど（笑），だからCATSと呼ばせてください。短くて済みますので。

私たちCATSは，エチオピアというアフリカの最も貧しい国，最貧国の北部最貧地域でリゾート，一方でガラパゴスと並んで世界最初のユネスコ世界自然遺産に登録されたシミエン国立公園の高度3500メートルという富士山の頂上近辺くらいの高さの所にある集落をいくつか選定し，そこで観光商品造成ということにチャレンジしています。住民の人たちが少しでも現金収入を得て，貧困から脱出できるようにというJICA（国際協力機構）という日本の政府機関を通じた支援，いわゆるODA（政府開発援助）支援をおこなっています。まず初めにこの6分半くらいのプロモーションビデオがありますので，ちょっと「えー！」と思うかもしれませんが，こんなことをわれわれはやっているという自己紹介の意味で，それを最初に見ていただこうかなと思います。これを見て，興味ないと思われるようでしたら，もうダメかもしれないというつもりでやっておりますので（笑），どうかお付き合い下さい。

ビデオ再生

西山：これは4～5時間くらいの半日のツアーです。2時間かけて車で山の中に入って行ったあとに，馬とロバのあいの子のラバという動物に30分くらい乗って集落にたどり着きます。そこで今住んでいるリアルなアフリカの先住民，高原の民の生活を体験するというツアーです。

（ビデオのシーンを見て）インジェラというのはクレープのような主食です。右側にいるのはわれわれのプロジェクトの若い先生とJICAの職員です。

（ビデオのシーンを見て）これは普通の住民の家で，週に1回くらいパフォーマンスの場所に使います。

（ビデオのシーンを見て）これはC.Wニコルさんで，年配の方はご存知だと思いますけれど，彼と組んで当地の森林回復のプロジェクトも行っています。

（ビデオのシーンを見て）本当に貧しい地域で電気もない，水もない，ほとんど公共のサービスのないところですが，飢えたりすることはなくみんな幸せに生きているのです。ただ，本当に貧しいです。

（ビデオのシーンを見て）首都のアディスアベバとか近くの大きな街とかに来た観光客

にこのビデオを見せて，ぜひこのツアー商品を買ってください，あなたも行きませんか？と宣伝する観光客向けのビデオです。

（ビデオのシーンを見て）これはコーヒーセレモニーといって，日本の茶道のセレモニーと似たところがある，豆を焙煎するところから始めるという 1 時間くらいの，お客さんをもてなす伝統的なセレモニーです。

ビデオ再生終了

今のビデオ見てギョッと思った人もいるかもしれないし，うわぁおもしろいと思った人もいるかもしれません。アフリカに行くとよくある，少数民族がいろんなところにいて，輪っかを何十本もはめている首長（なが）族，下唇に皿を入れてる部族といった，そういう珍しい習俗を見世物にして楽しむような観光，要するに見世物化した観光もアフリカでは長年，たくさん行われてきました。しかし，そういうことを扱ってきた旅行エージェントの人が，このツアーを見て感動し，「ここには本当のアフリカがある，住んでいる人の誇りがある」と言うのです。日常の文化を，胸を張って誇らしげにお客さんに披露し，さぁ飲め，さぁ食えというのをやらせてあげよう，こういうようなのが商品になる，もてなす仕組みとしてできたのだ，ということで喜んでくれ，今，売れつつある人気商品となってきました。

こういうふうな地元の人だけとかエチオピア人だけの気付かないアイデアを持ち込んで，地元の人と一緒に相談しながら地元の人が持続的に，僕らがいなくなった後も継続してやれるような仕組みを作って，残していく，これから使いこなしてもらう。そういうのが我々が考える地域における価値の創造，「価値共創」という言葉を CATS では使っていますが，まさに地域において価値を造り出し，それをみんなで協力して資源として使いこなす「地域協働」，場合によってはそれを「国際貢献」にも使っていくというのが私たちのセンター，できて 10 年経つセンターですが，私たちの目指している一つの方向性であります。おそらくは，こちらの研究所が目指しておられる地域共生というものと軌を一にするものではないかと思います。最初に種明かしといいますか，私はここに何が楽しみで伺ったかという理由について話しをさせて頂くと，われわれは大学院しか持っていません。修士課程と博士課程しかありません。観光創造，観光を創造するということで観光創造専攻という大学院があるのですが，学部を持っていないので日本中のあらゆる専門分野の学部生，社会人，海外からは留学生が来ています。そこでもし，あなた方のなかで，私の話を聞いておもしろいと思ったら，われわれの専攻にも受験しに来てほしい。われわれの専攻にも参画

してもらえないかなという下心もあり，講演をお引き受けした次第です。

こんなに若い人が多いと思っていなかったので，少し大人向けというか理屈っぽい話ばかり用意してしまいましたが，そういうことは気にせず聞いて頂き，あとで質問の時間を設けて頂いておりますので，その際に気さくに質問してください。

そういうことで，今，申し上げた3つのわれわれの理念，ひとつは「価値共創」という言葉です。これは，今まで地域の人が気付いていなかった価値を掘り起こすということでありますし，あるいは，別の次元のもの，アニメとか映画とかそういう二次元，バーチャルな次元のものと地域の現実のものとを結び付けて新しい価値を創るということにも取り組んでいます。それから，さきほど申し上げた通り途上国とかいろんな地域，まだ観光という意味では未開発の地域において価値を造りだしていくということをやっております。

もちろん，これは自分たちだけではできません。地域の人たちが地域のことに関して一番物知りです。さまざまなプレイヤーというか関係者と一緒に協働しながら，地域の様々な関係者と協働しながら見出した価値を，今度はどのように使いこなして行ったらいいかを考えていくわけです。そのための研究，難しく言えばマネジメントとか地域イノベーション，あるいはブランディングとかいう言葉も使います。私自身は90年代までは町並み保存ということで，景観の保存を一生懸命やってきました。集落とか町並みですね。白川郷や竹富島，萩といったところでやっていたのですが，21世紀に入って，2000年代からは世界遺産に関わることが多くなり，いろんな世界遺産を拾い上げる，日本から世界遺産をユネスコに登録して行くとか，海外の世界遺産候補となっているところを調査して世界遺産にしていくためのお手伝いをするようになりあした。これもまた「価値共創」の仕事であり，地域の人たちとその価値を未来に伝えるための「地域協働」に関する研究でもあります。そして，日本で磨き上げたというか一生懸命考えた先端的な研究内容をもって，おもに現在はJICA，JICAと言えば青年海外協力隊というのは誰でも知っているのではないかと思うのですが，そのJICAを通じて「国際貢献」にも挑んでいきたいということで，10年ほどそういうことに取り組んでいます。

さて，私たちがCATS，観光学高等研究センターなる，「高等」などとずいぶん高飛車な名前ですが，私が付けたわけではないので（笑）。観光というのは何か，観光学というのは何なのかを考えています。

観光という言葉は中国では使われていなません。中国では旅遊（りょゆう）と言って，遊ぶそれから旅をして遊ぶという言葉をもって，日本でいう観光という意味をなしていま

す。英語ではTourism（ツーリズム）という言葉を使っており，基本的にはツアー，トリップ，自分が住んでいる場所から知らない場所あるいは自分が属している場所から知らない場所に行って，ある一定期間過ごして元に戻ってくるというのをツアーと呼んでいます。観光研究は日本で5，60年の歴史があるのですが，これまで観光というのは（図を指して）このど真ん中の青いところでありますが，観光業界のための研究というのが大いになされてきました。有名なところでは立教大学とか。

しかし，実際の観光というのは観光協会とか商工会とかNPOとか聞いたことあると思いますが，さまざまな公益機関，行政機関はもとより市役所とかそういうところがずいぶんと関わって観光というものは展開しています。札幌市もそうです。さらにその周りには関連産業として放送業，ブロードキャスティング，新聞，広告，映像，IT，調査系，医療系，それからクレジットカード，銀行，金融系，商社関係，こういうさまざまな分野があって初めて観光というひとつの事象が成り立つのです。

しかも，実際に地域が観光に取り組もうとすれば，こういう波及する分野に関してのことを考えなくてはならない。ということで，われわれは「地域」をキーワードにし，業界のためではない，地域のための観光研究を売りにしています。

お手元にあるパンフレットの図を見てください。私たちはそういう観光というものを大学として社会でリードして行かねばなりません。学問の体系化も一生懸命頑張っているのですが，これは大学院に来てくれてから勉強してもらってもいいかなということで今日は説明を省きます。

簡単にいうと，観光というのはライフスタイルですね。今までのように一生懸命働いて働いてやっともらった余暇に家族旅行に行くという一番典型的なスタイルというのが日本の戦後，高度経済成長後半から続いてきたわけですけが，今や観光と言っても多様なものがあって，行ったまましばらく住むとか，住み込んで働きながら楽しむとか，逆に旅に出ずにインターネットで家の中で仮想の旅を楽しむとか。まさにライフスタイルが変わってきています。そういうことを研究する人もいますし，それから，先ほど言った地域というものがどんどん世の中が進化して価値観が変わり，スマホとかインターネットとかSNSとかどんどんメディアが変わり，考え方がかわり，目標とする目的とする魅力が変わって行く中で，地域もイノベーションというか革新していかないととても世の中の動きに対応できません。ですので，地域の観光を巡る革新とは何かを研究する分野もあります。また，観光産業がどうイノベーションしていかないとならないのか，革新して行くべきかということについてもやっています。その辺は理論研究分野になります。一方で観光デザイン研究というのは，先程言った資源を具体的に現地にフィールドワークに入って調査をして地

元の人にヒアリングしたり，宝探ししたりして資源を見出し，それを管理したり保存したり活用したりするためのマネジメントの研究。また，観光というのは旅して訪れますよね，そこにあるモノの意味が知りたい，おもしろさが知りたい，価値が知りたい，希少さを知りたいという知的な欲求をちゃんと説明によって分からせてくれるのをインタープリテーションといいます。「インタープリテーション」はもともと「通訳」という意味，例えば英語を日本語にすることをインタープリテーションと言うのですが，自然や文化をインタープリテーションする，すなわち自然や文化の意味を説明するという意味で，インタープリテーションの研究というのも非常に観光では大事です。

そして，観光マーケティングというのは，観光の市場，マーケットがどこにどれくらいあってそれを調査して，売れる商品を作って行って適正なルートに乗せて消費者に届くようにするということを研究します。こういうのを組み合わせて観光というのは研究されていくのだろうと考えています。ただ，現在の，これまでの私たちのセンターができるまでの観光研究というのは，観光産業系の研究と観光マーケティング系の研究しかほとんどされていませんでした。日本では。欧米では文化人類学や社会学といった分野が60年代くらいから観光研究というのをしきりにやってきましたけれども，日本ではこうした分野の観光研究が非常に遅れています。観光研究が遅れ，政府による観光に関する取り組みも遅れ，この白く抜いている部分（観光産業系の研究と観光マーケティング系の研究）しかされてこなかった。白く抜かれていない4本の緑色の所，ここが，われわれが新たに社会に対して提案して研究対象としている部門であるということをこの図が示しています。もちろん，まだわれわれも試験段階というか，これを一応，こういうふうにパンフレットにしていろんな人に批判してもらってそれを糧にしてまた考えて行こうというところであります。

そういうものが具体的に社会でどういうふうに使われるかということも書いておりますが，興味ある人は見ておいてください。

私たちの研究センターおよび大学院の売りは何と言ってもフィールドです。まさに地域創生というようなことを考えるうえでも，本物の地域を知らない限りは何も言えませんので私たちはできる限り現実的な具体的な地域の悩みとか課題とか希望とか，こうしたいという願い，望み，そういうのを現場で解決して行くということをお手伝いしさせてもらう中で，そこから理論的・研究的な成果も収穫するということをやっています。

ここから皆さんお持ちのパンフレットの中にある年表と一緒に説明させてください。

まず，2006年に私どものセンターはできました。実は2003年に小泉純一郎というちょっと変わったライオン丸みたいな首相がいましたが，あの首相が2003年にはじめて日本の

総理大臣として，観光立国について，はじめて「観光」という言葉を使って演説をした首相なのです。これからは観光が日本の国を成り立たせていく重要な産業である，観光が大事であるということをはじめて言ってくれた。そのときにブレインをしていたのが石森秀三先生という初代の CATS センター長で，この人が同時に小泉さんにささやいたのは「観光を国として政策として取り組むなら，ちゃんとした観光の研究センターを国立大学につくりなさい」ということです。結果としてそれがたまたま北大につくられることになり，言い出しっぺの石森先生がセンター長に引き抜かれた，ということでわれわれのセンターの歴史が始まります。

2007 年には 1 年遅れで大学院観光創造専攻ができます。ここには JR 東日本や北海道も寄付講座という形で教授 2 名分のお金を出してくれました。

われわれの地域協働，地域創生の話の始まりがまず 2010 年，ニセコ町と包括連携を結びました。ここには書いておりませんが，ニセコ町との関係の中では観光に関する人材育成のためのプログラムを経産省から予算を取ってきて 2 年間ニセコ町でいろんなレクチャー，セミナー，勉強会を開いてニセコ町の観光人財育成を行いました。2011 年からはいよいよ JICA からのオファーを受けまして，技術協力プロジェクトというのを始めます。先ほどのエチオピアですね。あれが 2011 年。後程また少し話します。

2012 年には世界遺産の白川村と包括連携を結びます。これは北海道ではなく岐阜県ですけれども，白川村。それから美瑛と結ぶのです。まずこのエチオピアですね。シミエン国立公園というガラパゴスと一緒に最初に世界遺産になった公園なのですけど，実はこの公園の初代公園長が C.W. ニコルだったのです。偶然なのですけが，その C.W. ニコルが初代公園長だったことが後で分かったので，彼にコンタクトを取って，30 年，40 年経って今，日本が支援しているから一緒にやらないかと声をかけて，彼は乗ってきて，「よし，じゃあ俺が表に出てもいい。やるぞ」ということで，やっているという経緯があります。この公園および周辺地域における官と民が協働するコミュニティ・ツーリズム開発ということでやっています。

住民の人は貧しく，しかし生きていかなくてならないので，農地を拡大し放牧を行うのですが，それが自然環境を破壊してしまっているので，その住民の人に先ほどのような観光で収入を得る手段を提供し，得た現金収入の分，少しずつ自然を回復してもらうために，彼らの農地を放棄してもらうというのがこのエチオピアプロジェクトです。

白川村との包括連携についてですが，白川村に関しましては，実は私がもう30年以上お付き合いしているところでそのつながりもあって岐阜県であるにもかかわらず包括連携を結んでいるのですが，ここは別の意味で危機遺産になりそうになりました。だいたい白川村はすでに70年代から有名な観光地だったのですけれども，世界遺産になる前は6，70万くらいしか観光客が年間来ていなかったのが，世界遺産になった途端に，とんでもない山奥であるにもかかわらず150万くらいの人が来はじめたのです。それで車が大渋滞を引き起こしたり住民の人がどうしてもそれに対応する商売をするおかげで農地が荒れてきたり，いろんな問題が起きました。そこでその世界遺産を何とか立ち直らせるための世界遺産マスタープランをつくろうということになり，うちのセンターで策定のお手伝いをしました。

そういう白川村の世界遺産を守るマスタープランをCATSが引き受けて作ったのですが，われわれが勝手に作るのではなく，何十回も住民の人と会合を開いて，そして世界遺産の意味をもう一度住民の人に理解してもらって，そして住民の人たちと一緒に悩みをはっきりさせて，問題の発生原因をはっきりさせて，そしてそれに対する処方箋を考えるということを非常に丁寧に手作りでやる，というのがわれわれのやり方の特徴であります。それをさらにブレークダウン，マスタープランを具体計画に落としていく中で観光の基本計画を作ったり，景観の基本計画を作ったりして継続的に関わっています。

美瑛町は，みなさん行った人も多いと思いますが，美瑛町もやはり丘のまちで景観がきれい。最近では写真にあるように青い池という，砂防工事をしたら偶然にできた神秘的な青い池が年間60万人もの人を呼び込んでいます。この偶然の資源にものすごい数の人をひきつけているラッキーなまちなのですが，その農業を主体とする美瑛町というまちが今後観光とどうつき合って行けばいいのか，観光と農業をどういうふうに相乗効果を持たせていけばいいのか，要するに観光によって地域をブランド化し有名にし，いいイメージを持ってもらって，それがスーパーでたとえば「美瑛牛乳」と書かれているとついみんながそっちを飲みたくなるというように，そういう形で農業製品を高付加価値化させていくとこういうふうなことも地域を救ったり豊かにしていく重要な手法ですよね。TPPとか言ってずいぶん騒がれていますけれども，そういうふうにして強い農業を作って行くために観光に何ができるのかというようなことを一緒になって考えていっております。

（写真をみながら）これ，右側に中国からの留学生，うちの大学院生がアンケート調査

を一生懸命やっている写真を載せているのですが，私たちの大学院はいろんな授業を設定しています。こういうフィールドに出かけて行って調査の基礎スキルを修得させる。あるいは，その調査結果をみんなで分析してその分析に基づいて提案をしていく。学生ですからわれわれが包括連携で美瑛町からプロとして引き受けている仕事とは別に学生さんたちに自由な発想で提案をしてもらいます。私たちのプロとしての仕事より，そっちの方が町長さんとか役場の人は楽しみにしていて，学生さんたちと非常に和気あいあいとやっています。あとから出てくる留学生がいるのですが，この人はそういうのをきっかけにして美瑛町に就職しました。そういうこともあります。

2012 年からヨルダンでまた別の JICA 国際協力事業を始めました。ヨルダンと聞くと怖いと思うでしょう。ヨルダン川の西側はけっこう物騒ですけど，それでも大したことはありません。ヨルダンというのはヨルダン川を挟んで東側，ヨルダンとパレスチナ（イスラエルの一部）は，ヨルダン側を挟んで隣り合っている。その間をヨルダン川が流れている。その東側は比較的安全です。今年の初めに IS からテロで殺されてしまったヨルダン軍人もいましたけど，あれは非常に稀なことで，基本的にはわれわれは常にここに入って技術協力をやっています。

私は 13 年からセンター長になりまして，14 年からフィジーの JICA 事業を，そして今年からですが南部アフリカのジンバブエで同じようなコンセプトで，内容は様々ですがやってきております。

ヨルダンでは何をやっているかというと，サルトという歴史的都市があります。首都はアンマンでが，そのアンマンから車で 30 分ほどのところに 19 世紀にヨルダンが初めて近代国家として立ち上がった時の最初の首都の役割を果たしたまちがあります。そこのまちでは，黄色い石，札幌には札幌軟石というのがありますけど，それよりももっと黄色い石灰石があり，これが豊富に採れるということで，まちじゅうが真っ黄っ黄になるくらいの石造りの建物があります。この建物を中心として世界遺産にしていこうという動きがあります。

一方でヨルダンは石油が出ない国なので貧しいです。隣のサウジアラビアとかクウェートとかは石油で金持ちですけどヨルダンは貧乏です。だから，そういう観光資源を有効利用して外貨を稼ぐ，ヨルダン全体としては三次産業を盛んにしていこうということのお手伝いをしているのですが，おもしろいのは，左下の写真は実は特別な意味を持っています。

搭が２つ建っていて右側には十字架，左側には三日月のシンボルが刻まれています。どういうことかと言うと，右側はキリスト教の教会，左側はイスラム教のモスクなのです。われわれは日本のマスコミからの情報ですっかりキリスト教徒とイスラム教は仲が悪い。恨み合っている，いがみ合っているという先入観を持ってしまいますが，実際にはまったくそういうことはないわけです。

一部の過激な人たちがそういう溝をどんどん深めて，自分たちの利害に結び付けようとしていますけれども，実際にはキリスト教とイスラム教はルーツは同じですし，そこから派生した分派に過ぎない。しかも，今現在はイスラム教のほうがはるかに数を伸ばしているという現実も実際あるのです。

そういう中で，このサルトというまちは，ヨルダン自体はイスラム教を国教としている国でありますが，キリスト教も寛容に受容して，この特にサルトという歴史が古い町は教会とモスクが併存しているのです。不思議な話ですが，キリスト教の小学校にイスラム教徒の子が通っている，またその逆もある。また，ある教会の中ではイスラム教の人がじゅうたんを敷いてお参りをしているというようなことが，日常の生活の中で営まれている。そういう調和が，今の世界情勢の中では日本人からすれば考えられないようなことが当たり前に起きていて，それをちゃんと説明できることもあるのです。そういうこと自体を観光資源として来た人に学んでもらったり驚いてもらったりするというそういうまた観光商品を作って行こうというようなことをやっているのがヨルダンのプロジェクトです。

ペルーは後から時間があったらご説明したいと思いますが，簡単に言いますと，マチュピチュはみんな知ってますよね。今，ペルーに行く観光客のほとんどは南部のマチュピチュに行きますし，日本人が一番好きな世界遺産はマチュピチュと人気投票で言われています。それに対して「第二のマチュピチュ」と呼ばれる空中遺跡が北部のぜんぜんマチュピチュとは違う場所にあります。この第二のマチュピチュと呼ばれているクエラップという左側の遺跡ですが，この遺跡を中心としたコミュニティ・ツーリズム，周辺の農村集落と協働する遺産管理をやりたいという JICA の申し出があったので，ペルーの専門ではないのですが，厚かましくも乗り込み，いろいろと遺産を生かしてなんとか世界遺産にしていきながら地域の文化も守って行き，全体として地域が豊かな地域になるようにしていこうというプロジェクトをやっています。これも右側の写真にありますが，学生たちがたくさん参加して基礎調査をおもしろがりながらも汗を流しています。ここも標高 3000 メートル以上のところで酸素が薄くて大変ですが，学生たちが果敢に調査にチャレンジしてくれてい

ます。

フィジーは南太平洋です。知っている人がいるとすれば，ハワイとかモルディブとかタヒチとかと並んでリゾートアイランド，というイメージではないかと思います。もちろん，それは観光という意味では一つの側面ですが，フィジーはイギリスからみてちょうど地球の真裏くらいにあって，ヨーロッパの植民地政策が最後にたどりついた場所なのです。最後はもうイギリスは植民地にしてもしなくても良かったようなときに，フィジー側が選んでイギリスに植民地にしてもらったという経緯があるのですが，この中途半端な植民地の最初の首都となったまちがあり，これがものすごく魅力的なレブカという都市なのです。わずか 7 年間首都をやってすぐ首都機能は移転してしまいます。土地が狭くて。その 19 世紀の植民地時代の町並みがそっくりそのまま残っているのです。これを世界遺産にしようということで，私は 2003 年くらいからこの地域に入り，JICA とは関係なくずっと調査をしていたました。これが，ちょうど富士山が二年前に世界遺産になりましたね。それと同じタイミングで世界遺産になりました。これも後から話しますが，九州大学の時代から私と一緒に研究していた，あ，私は 5 年前に九大から来たのですが，その九州大学の時代から一緒にやってきた若手の研究者が一生懸命泊まり込みでやった調査が実を結んで世界遺産になりました。そこに引き続き JICA の事業が入って支援をしています。

国内に行きますが，新しい情報としては南砺市といいまして，これは砺波平野の南側という意味で，南砺という合併してできたまちです。ここでメディアコンテンツと観光との複合的研究ということで，このパンフの写真を見ると歴史的遺産みたいな感じですが，実際には有名なアニメ制作会社があり，このアニメ制作会社と南砺市という行政，南砺市行政，地方自治体ですね，それと北大が三者で包括連携を結び，そして，市が整備する新しいオフィスにいろんな企業を呼び寄せてわれわれの大学のオフィスも造って，みんなで新しいコンテンツ，産業を創りだしていこうというようなことについ最近，包括連携を結んで取り組み始めています。

それ以外に，札幌観光創造研究会といって，札幌市役所と CATS が組み，札幌市役所の人たちに月に 1 回くらい大学に来てもらい，職務時間中に，札幌の観光に関する話を，「あ～でもない，こ～でもない」と議論し合う場をつくっています。それで，必要だったら民間の人，銀行の人やメディア関係の人にも入ってもらいながらしながら，札幌の観光は今後どうあるべきかについて考える研究会をやっています。その成果が今のところ二つ

ほどできていまして，ひとつは札幌市が策定した「観光振興ビジョン」，観光まちづくりについての基本的なプランを作りました。このために6，7回，北大に集まって札幌市役所の中の観光セクションだけではなく，いろんなセクション，教育委員会，都市計画，景観，新幹線誘致とか空港管理とか，あらゆる観光に関わる可能性のある分野の人たちに集まってもらって議論する中で，札幌市の次の観光のビジョンを考えるプランを作ったりしましたし，今日，みなさんにお配りした「札幌でしかできない50のこと」です。すでに知っている方もいるかもしれませんが，これは去る9月の頭にプレス発表したもので，大人気ですでに売り切れています。今日初めて手にした人はラッキーです。ファーストエディションはもうほとんど売り切れてどこでも手に入らなくなっています。これは何かと言いますと，タイムアウト社という，歴史が30年くらいあるイギリスのロンドンで生まれた非常に有名な観光情報誌を制作する会社です。ここはマップと都市の観光情報誌を世界の100いくつかの都市で作っています。このタイムアウトのネームバリューとネットワークを使って札幌の観光を売り出そう，と考えました。ただ，売り出すのもただの売り出し方じゃダメ。先ほど言ったようにライフスタイルが変わってきた，という話もしましたけれども，わたし，6年前に九州からやって来て札幌を見て，なんて札幌市民はいい暮らしをしているんだろう，と思いました。おいしいものを食べ，豊かな空間で過ごし，冬は多少大変ではありますけれども，ものすごく楽しいことをやっているんですよね，いろんなことをやっています。小さな単位で趣味レベルでやっていること大通りのビアガーデンとか，観光客がぜんぜん知らないようなところですごくリッチな暮らしをしていることに気が付きました。そういう札幌市民が日常楽しんでいることを今から訪れる人に伝えることができないか，札幌でこの50のことをぜひやってくださいというコンセプトでこのマップを作ったんです。不思議なことにこれにお金を出したのは札幌市と北大です。こういう観光情報誌に公共の役場と国立の大学がお金を出すことを不思議と思いませんか？　それくらい観光というのは公共性をどんどん帯びてきている。私たちは，大半は札幌市が出したのですが，札幌市からすればそうやって札幌市のイメージが上がる，札幌市を訪れた人が満足して帰る。時計台見てラーメン食ってカニすすって帰るだけではなくて，そういう新しい感動を得て帰ってくれれば札幌市役所として長い目で見ればとっても大きな利益なんですね。だからそのためにお金を出す。そうやってこれ，日本語が5万部，英語が5万部作られました。英語はまだあるそうですが，日本語はほとんどなくなりました。札幌市もびっくりしていて，これからこのセカンドエディションを出そうと。セカンドエディションを出すときはもっとまた，別の切り口でやってみようと。それから，中国語出そう，台湾語出そう，ハングル語出そう，というふうにしてこういうことをどんどん展開していくこと

によってみなさんも興味を持ってほしいわけです。

観光創造研究会は，もし皆さんの中で，私もと言う方がおられましたら，参加してもらって構いません。次のエディションを作るときの手伝いをしてもらってもいいかと思っています。いろんな人のいろんな視点がより価値のあるものを造りだしていく，さっぽろ観光創造研究会という都会型の研究会もやっています。キーワードは住むように訪れてほしいというのを私たちが考えているわけです。住んでいる人が楽しんでいるように，来た人にくつろいでもらいたい，楽しんでもらいたい，味わってもらいたいというのがこのコンセプトであります。

また，こんなこともやっています。尾道というとちょっと前は映画の街とか坂の街として若い人に有名でしたけど，最近ではどうでしょう？みなさん，あまり知らないかもしれませんね。アニメの舞台としても有名ですし，映画の舞台では大林宣彦さんがいくつも映画を作り，三部作とか有名です。ここがどうも最近，観光的に行き詰まっているというのです。映画とか坂とか言ってたけどそのあとの展開がないから，もう少し観光資源の価値を向上させたいということについて私どもに相談がありまして，じゃあということで尾道市の観光資源の戦略ということもやっています。

これは，洞爺湖の漫画アニメフェスタといいまして，今や5万人規模でお客さんを集めている大イベントとなりました。わずかまだ5回目ですが，これも陰で企画の立ち上げ等をCATSの山村教授という先生がかなりテコ入れしてやってきたイベントもあります。こういうのも地域における価値の創造であり，地域おこしでもあります。

先ほども言いましたが，うちは大学院しかないので，みなさんがすぐ参考にできるキャリアパスというのがなかなか説明できませんが，私がCATSに来て6年間で関わった学生の中で地域創生に，今まさに実践で貢献してくれている人材にどんな人がいるかというのを説明します。

今，42歳の池ノ上さんという，実は私の九大時代からの教え子でもあるんですけど，彼は九大の博士課程を出ました。九大では博士を取りませんでした。そのあと，沖縄県の竹富島という離島に行って，2年半，遺産管理型NPOの立ち上げに奔走しました。竹富島という人口300人くらいの島で，世界遺産ではありませんけれども，国の町並みの保存

地区になっていまして，観光客が50万人ほど訪れています。ただ，非常に薄っぺらい観光になっています。1時間くらいの立ち寄りで，バスでぐるっと回って帰って行ってしまう，くらいの観光しかしていないので，そこにもっと島の価値をきちんと知ってもらって，遺産を管理して行くためのお金もちゃんと落としてもらおうという，そういうためのNPOを作りました。そこで，その立ち上げで2年半頑張って，そのあと手腕も認められて財団法人日本ナチュラルトラストという，これはイギリスの流れでできた財団法人で，日本中のさまざまな遺産を発見して管理する財団で，彼は数年働きました。そのあとわれわれのCATSで特任の助教の先生になりまして，そこで勉強して北大で博士をなんとか頑張って取って，今は北海道教育大の准教授として函館で頑張っている研究者がいます。彼の写真は持ってきていませんが，けっこう最近，僕なんかよりはるかに新聞とかテレビとかに出て自転車こいだり，コメントしたりしてるんですが，彼もいま，私が若い頃やってたように，あなたたちくらいの年齢の学生をたくさん束ねて，いろんな地域に入って行っていろんな活動をしています。

それから花岡さんというのがいるんですけど，彼はJICAの専門家として先ほどのペルーとかエチオピア，ヨルダンで活躍しているんですが，この人は私と知り合う前は高専におりまして，学芸員資格を取り，芸術系の私立大学に行き，そのあと九大の博士課程に来たんですね。彼は九大で博士を取得した後に文化振興の財団の学芸員となって博物館，美術館等の現場で5年間くらい働きました。そのあとにわれわれのCATSに来て特任助教になって特任准教授になって，今はJICAの専門家として1年の3分の2くらいを海外に出て，国際協力の最前線で大活躍をしております。彼は同時に先ほどの尾道の仕事とか，今日は言いませんでしたが，日本のいくつかの地域に入って，学芸員を取得した能力を使っていろんな地域のお宝の掘り起こしとか博物館と連携した地域づくりとかをやっています。

また，先程のエチオピアのビデオでコーヒーをすすっていた女性ですけれども，八百板先生というのもJICAの専門家でエチオピアとペルーを切り盛りしてくれている若手の研究者です。彼女は北大の博士課程で博士を取った後にすぐにうちの特任の助教の先生になって，今は准教授になってですね，プロジェクトマネージメントまでできる能力を身につけて，JICAの専門家として活躍しています。

また，もう一人，麻生さんというこの人もJICAの専門家でもあるんですが，その前に白川村に10年間通って，先程のマスタープランとか住民と泣きながらお酒を飲みながら

努力して作り上げていった強者で，日本で生かした知見を海外でも展開しています。彼女は九大で博士を取った後，白川村で村の職員，学術研究員としてとして働き，そのあとCATS に来て，先生になって，つい最近ですが，九州大学に栄転されました。こういうふうにして，現場でのフィールドでの実績が買われるのですね。

同じ世代で村上先生という方もやはり JICA 専門家で，学芸員の資格を持っていて，九大で博士を取った後に萩で萩の市の嘱託職員として入って，萩まちじゅう博物館というエコミュージアムという運動があるんですけども，そこの NPO と協力して萩のまちづくりに貢献した後に，うちの CATS に来て JICA の事業を担当しています。

ここまでは，ちょっと博士を取る人をターゲットとしていて難しかったかもしれませんが，この後は修士卒の人たちです。この三宅さんという人は旅行会社で社会人として働いていて，それを辞めて北大の観光創造専攻の大学院に修士で来ました。修了後に JOCV というのは青年海外協力隊です。これはわれわれが枠を持っているわけではないのですが，われわれが推薦することで JICA の協力隊，普通に応募すると倍率が高くてなかなかなれないのですが，その短期のボランティアというのに経験させることができます。彼女はその JOCV としてエチオピアで 3 カ月くらい泣きながら一生懸命働いて，そのあと，今，中札内の農村休暇村というところで働いています。ちょっと，後で記事が出てきますのでお見せします。

それから，うちの専攻の博士課程に入ってきた宮城島くん，という建築士なんですけども，理科系の大学で建築の修士を出た後に，なぜか我が観光にやってきて，そして観光創造にいる間に国家資格の一級建築士の資格を取りました。これ，今はほとんど取れません。実務を積んだ人でも難しくてなかなか取れません。実はこの間にスペインに 1 年間留学もしていました。そしてその能力を使って，今，学生の身分でありながら美瑛町の道路とか広場の整備の提案をやって，あるいは一つの建物の設計管理も任されてやっています。これもあとで映像があると思います。

それからさっき，ちょっと話した許さんという台湾からの留学生，彼女はうちの修士を今年の春修了し，そのまま美瑛町に見込まれ引きがあって「丘のまち美瑛活性化協会」という半官半民の役場の外郭機関に就職して働いています。この彼女も実際には民間企業の内定ももらっていたんですけれども，地域で働くことができるならと，そういうのを蹴っ

て美瑛に行きました。

先ほど言った三宅さんという人の記事が載っているんですけれども，中札内グルメフォンド実行委員というような形で，サイクリングと美味しさを結びつけた地域おこしをやっているという記事が出ています。こういうのを見るとわれわれは一番うれしいですね。うちでヒーヒー言って論文書いたり勉強してた，JOCV に行って泣いてた彼女が地域で活躍していることがわれわれにとっては最大の喜びです。

また，先程の許さんというのはですね，この役場の広報があるんですけれども，ほかの 6 人の新入庁員は扱いこれくらいなんだけども，特出ししてもらって，許さんという人が今度美瑛に来ましたと言って，役場が広報で大きく扱ってくれました。彼女は今，ビエールというつい最近オープンした地域のコミュニティ施設の管理もやっていてここでデスクを置いて働いているんですが，この建物は先ほど言った建築士の宮城嶋くんが設計監理した建物です。3 億円くらいのプロジェクトです。

ですから，多分その宮城嶋というのもただ一介の若手建築家だったらこの仕事をすることはなかったんですが，われわれ包括連携を結んでいることで，われわれのプロジェクトに一からずっと関わってきた。建物の性質とか街の中における意味とか，そういうことが一番分かる立場にいて，その彼がワークショップを住民の方々と開いて提案していくんです。それが非常に美瑛町の人から認められて，ぜひとも彼に設計を頼みたい，と。ちょうどその時に彼が一級建築士の資格を取ったものですから，そのまま彼にうちの大学のプロジェクトを出てもらって独立した設計事務所を作って最初の仕事としてこの大きなプロジェクトをやった。これ，ものすごく評判が良くて，なかなかいい人材が，要するに普通に建築学科の中を進んで行っても，十分成長したであろうが，なぜか観光創造にやって来て，うちで観光という視点から地域づくりを勉強し，そしてまた建築家に帰って行くという，こういうふうなキャリアパスもあるという事例です。この手前に写っているのがその宮城嶋くんなんですけども，まだ 29 歳で，たまたま昨日，一昨日と学部一年生の，あなた方と同じか下かもしれませんが，北大の一年生の全学の授業でいろんな学部の学生の寄せ集めた研修ツアーを組み，この建物の見学を含めまして美瑛の調査をしたんですが，その時の写真です。この建物は，廃墟になったスーパーのリノベーションなんです。新築じゃないんです。廃墟になったスーパーのスケルトンというか骨組みを使ってやったものです。話すときりがないのですが，非常に面白いスペースを造りだしていてまちづくりの核に

なっている施設です。みなさんもぜひ美瑛に行ったら，駅のすぐ近くですからビエールという施設，のぞいてみてください。無料でもちろん入れますし，何時間いたってタダですし，電源だって無料で使えますし，子供連れで行けば子どもを遊ばせるスペースもありますし，こういう感じですね，子どもを遊ばせるスペースもある。こんな施設が地域にあったらいいなという施設を箱ものとしては彼が設計し，中身は許さんという人が一緒になって注入して行く。こういうまさにコラボレーションですね。もちろん，二人だけでやっているわけじゃない。地域の美瑛の方々と一緒にやってるわけですけども，まさにこれが地域の価値を共創，共に作り出すと，いうふうなことなのかなぁと。

あと 20 分ほどですが，ちょっと国際協力の話をしましょう。

ここで言う国際協力は一般的には ODA のことです。NGO がやっている「国境なき医師団」というのもありますが，今日私がお話しするのは，ODA，政府開発援助。政府による，日本であれば日本の税金を使った国際協力，支援のことを国際協力とここで呼んでいます。みなさんもご存知かと思いますが，国際協力の主なこれまでの柱というのは，人の命を救うことでした。飢餓で飢えている人たちに食料を運び，医療を提供する，あるいは文字が読めない人に文字を教え識字率を上げる，文字が読めるような教育を施す。こういった，食料，医療，教育といった三大分野がこれまでのメインだった。今だって困っている人には当然これが重要となります。ただ，衣食住が足りて，命の危険がなくなった次の段階で，先程のエチオピアのような事例もそうですが，必要なのが，今さら資源もない，大したスキル，技術もないというところが外貨を獲得して経済的に発展して行こうと思ったときに，観光というのはそれがふさわしい地域にとっては非常に重要な処方箋になります。ですから，観光開発というのがこれから必要になってくる。この国際協力分野で必要になってくるというのがわれわれの認識であり，日本の外務省をはじめとした政府の認識でもあります。オリンピック・パラリンピックが 2020 年にあるから，海外の旅行者呼び込んで金儲けしようという薄っぺらな観光の国際化の話もありますけど，もう一つの本質的な部分では，やはり観光という技術が，これからの世界を救っていくというボトムオブピラミッド，要するに人の暮らしにはやっぱり貧しい底辺の人もいるけれど，このピラミッドの底辺を持ち上げていくのに重要な産業は観光である，というのがわれわれの考え方であります。

それを考えるときに，これは北大の一年生にも話す話なんですけど，ひとつは観光は

21 世紀のグローバルフォースである。世界を変える力をグローバルフォースと言った経済学者がいます。じゃ，20 世紀のグローバルフォースは何だったと思いますか？ 20 世紀を画期的に変えてしまったものって何でしょう？これは石油です，石油。19 世紀には石油は使われておりません。石炭は産業革命で使われてきましたが，石油というものは，20 世紀に，まずエネルギー革命をもたらしました。いやそれだけじゃなくて，衣料とかあなた方が今，着ている物もどれだけ石油が使われてますか？食の世界，衣料の世界，われわれの建物，すべてこれ，石油製品なしには考えられません。ですからエネルギー革命だけではなくて，あらゆる意味で石油というものが 20 世紀の世の中のあり方を変えたんです。ですから 20 世紀のグローバルフォースは石油であった，といわれています。これはほとんどの人が疑わないでしょう。

今，21 世紀を迎えて国家間で取引されている貿易品の最大品目は石油です，今も。では，2 番目は何ですか？と聞くと，これ，観光なんです。観光によるお金の移動というのが石油に次いで第 2 位なんです。で，UNWTO という国連世界観光機関が推計しておりますが，今，10 億人くらいの人が世界をまたいで旅しているのですが，2020 年頃には 16 億人くらいの人が国をまたいで旅するようになる。そうなったときには，確実に石油を抜いて観光が最大の貿易品になる，というふうに言われておりますので，まずそういう経済的側面から見ても，観光はグローバルフォースとなり得る。間違いなくなると言われておりますし，観光の力はそれだけではなくて，普通，観光というと慰安旅行とか遊びに行くとか暇だから行くとか趣味で行くとか家族に付き合っていくとかいう，なんとなく怠惰な感じがありますけども，そうじゃなくて，観光というのは異文化交流と考えてもらいたいんですね。

なぜ，あなたは旅に行くんですか？と，そこに地元にはないものがあるからでしょ？それは文化の違いであったり，場合によっては経済の違いであったり，宗教の違いであったり，さまざまな物の違いがあるからそこに行く価値がある。同じものだったら行く必要がないわけですよね。

ですから行った先でさまざまな文化を知ることができて，その文化を知ることによって自分の文化がどうなのかっていうことが分かる。経済もそうです。そこの土地の貧しさを知ることで自分たちの豊かさを知ることができるし，豊かさを知ることで自分たちの足りないものを知ることもできる。そういう文化に限らないんですが，さまざまな環境や生活環境の違いというものを知るために観光はあるんだと思ってほしいし，もう一つが私たちが先ほどから言っているような，コミュニティ・ツーリズム，あるいはコミュニティ・ベー

スド・ツーリズム，ベースというのは基盤となる，コミュニティ・ベースド・ツーリズム，CBT と短く言わせてもらいます。あとでちょっと出てきますけれども。そういう日本というのは，何か観光分野で得意技はないかなと思ったときに，やっぱり 70 年代くらいから，まちづくりというのが非常に得意になってきたんですね。私は本当は専門が建築の都市計画なんですが，そういう地域主体のまちづくりという考え方は，実は日本の得意技なんですね。本当に地域の人が主体になって主人公になって，そして自分たちのために自分たちのまちづくりを考える，そういう組織を作る力とか，目的を持つ力とか，解決策を見出す力とか，見出した解決策を実践する力，それを継続する力，力というか能力というか仕組みというかですね。わたしはエチオピアに行ってる間に，そういうコミュニティ・ツーリズムというものが実は日本のお家芸なんだということに気づきました。それで，やっぱり観光は，コミュニティ・ツーリズム，地域の主人公を早く見つけて，その頼りになる人と一緒にやっていく。そして，コミュニティ全体が豊かになって行く観光をやればいいじゃないかというのがわれわれのアイデアなわけです。

ちょっとこれも理屈っぽい話ですが, JICA というのはこういういろいろな協力のスキームの枠組みを持っています。有償資金協力というのはお金を低金利で貸して，いろんなアドバイスもしてあげます，というもの。無償資金協力というのは，本当に困っている人，難民とかに無償でもう返してもらわなくてもいいですということで，協力する，お金をあげるやり方。そして，技術協力。われわれがやっているのは基本はこの技術協力。要するに物とかお金は渡さないけれども，お手伝いします。技術をお渡ししますというもの。それから，青年海外協力隊とかには入るんですが，国民の協力事業といって，専門家ばかりに任せるのではなくて，国民が自らの発意，ボランタリーの精神に基づいて国際協力に参加してください，という国民の協力事業という分野もあります。そして，災害の特別援助なんかもあるんですが，私どものセンターが関わっているのは今，黄色く塗ったもので，これだけのものに今関わって，有償資金協力の付帯事業としてはペルーで関わっています。技術協力はエチオピア，ヨルダン，ジンバブエで。それから専門家の派遣だけだとドミニカやパレスチナ，それから研修員を受けるという現地の人たちを日本に呼んできて，研修してあげるというのが中南米やエチオピアやヨルダン。それから，協力隊はエチオピアやフィジー，それから草の根技術協力という枠組みはフィジーでやっております。こういうさまざまなものに CATS としては取り組んで，たぶん日本でここまで多彩に国際協力に取り組んでいる大学研究機関はないと思います。そこはわれわれが自負しているところでもあります。大変ですけどね。

協力隊はもしかしたら，あなた方が一番興味あることかなと思ってちょっとだけパネルを持って来たんです。青年海外協力隊というのはこんなふうにパソコンを教えてあげたり家畜の育て方を教えてあげたり，いろいろな分野があって，一番若ければ4年生くらいでも行けます。私も自分の教え子の4年生の子を建築の専門家としてヨルダンに派遣して調査を2カ月間とか半年間とか手伝ってもらったりしたこともあります。ですから，あなたたちが今，大学にいるってことは，何らかの専門をこれから身につけていくということですから，その身につけた専門が国際社会から求められているものであれば，それを活かして協力隊で行くことができるわけです。

ただ，一般的には40歳くらいまでの人が対象になりますので，なかなか応募しても当たりません。やっぱりキャリアのある人，技術のある人に当たって行きますから，競争率何十倍でなかなか通らない，という現実もあります。ただ。私たちは組織ぐるみで，大学として国際協力やっているので，「うちの学生であれば大丈夫です」と言ってJICAを説得してJICAにお金を出してもらって，学生を協力隊として派遣する。そうすると協力隊であったというキャリアは就職にもすごく役に立ちますので，うちで，先程の三宅さんという女の人なんかエチオピアでJOCVをやったことが次のプロモーションにすごく役に立ったという話も聞きます。これは一般的なJICAのホームページから取った写真ですけど，これはエチオピアに私が実際に派遣した青年海外協力隊がいろんな調査をやったり，ワークショップをやったり，ミーティングをやったりしている写真です。

さて，ちょっとより大人向けの話しかもしれませんが，なんで大学が観光開発国際協力に乗り出さないとならないのかということをちょっとだけ説明させてください。まず，国際協力の現場における今，JICAを中心としたODAの現場の課題とは何かというと，観光開発日本人専門家がいないということなんです。それから，今，専門家と言っている人たちの能力に限界があるということもある。これは，偉そうに言うと，大変申し訳ありませんが，先ほど申した三大分野ありましたね，医療，食料，教育，ああいう分野の専門家は民間コンサルタントも豊富に持っているんですね。あとは，いわゆる土木，建築系の技術とかいうのは民間は圧倒的に力を持っているのですが，観光という分野はちょっと特殊な分野です。先ほど申し上げた通り，私たちCATSが目指している学問の体系なんかを見ていても，ちょっと一筋縄にはいかないですね。それから，従来の観光系の大学がやってきたような研究を積み重ねても，それだけでは国際協力の現場では役に立たないんですね。それだけでは不足するわけです。で，私たちは2007年頃，JICAの担当の課長さんと

かが大学をわざわざ訪ねてきてくれて，「僕ら本当に困っているんです」と。まさに，この課題に悩んでいる，と。専門家がいないし，能力が低い，と。だからなんとか大学が乗り出してくれませんか？というふうに声掛けをいただきました。そのときできるかどうか分からなかったんですが，言われたらやらないと。つい新しいことをやりたがるものですから（笑），やることにしました。

やり始めて分かったのですが，やはり一つは，この観光開発という分野そのものが境界領域にあって，ちゃんと分野として確立していない。だからその分野としてJICAも予算をちゃんと取り切れていない。常にいろんな周辺にあるプロジェクトの一部として位置づけられたりして，なかなか分野が確立していない。だから，民間も専門家を育てにくい。ニワトリが先か卵が先かみたいなところがあって，これがどうもまずいなと考えました。だからやっぱり，われわれ大学が入ってやる以上は分野確立に貢献しなきゃいけない。そのためにはグッドプラクティス，といいますが，いい成功事例を作ることしかありません。そしてそれをモデルにして，社会に問うというのが大学の仕事だろうなと思っています。

また，市場開拓。われわれが大学として入って，われわれプロのコンサルとしてプロポーザルを出して，公示案件を取るという，専門的な用語で申し訳ないですけど，要はJICAが広く世の中に「これやってくれる人いませんか？」と言って公募すると，それにいろいろ民間の会社が応募してくるんです。そのコンペティションに勝ったところがその仕事を取れるということになります。そこで，われわれがその仕事を取ってしまうと，民業圧迫だと，民間の仕事を公共の大学が取るとはけしからん，と。しかし，先ほど申し上げたように，分野が確立していないんだから市場を拡大する方が大事なんですよね。だから小さなパイを取り合うよりもパイを広げる方が必要というのが私の発想で，そういう意味でさっきと同じことなんですけども，いい成功事例が結果として市場を開拓していく。これも大学の仕事だろう，と。まあ大学だけではできませんが，大学にできる一つの仕事だと思います。

そして，当たり前ですが国際貢献。これは大学にむしろ言いたいことなんですね。大学の先生ってけっこうわがままで自分のしたい研究しかしないんですね。だから，科学研究費とかいろんな国や民間助成組織の予算を自分がやりたい研究のために取りに行きます。必死になって。高度な知能をつかって。ですけど，外から「これ，やってくれませんか？」って言われたことは，ま，やりたくなかったらやらない。要するに自分がやりたいことしか

やらないという，ちょっとわがままなところが大学の先生にはある。ですから，JICA なんかからすると，頼みにくいわけですよね。われわれはもう少し広くとらえようと。たとえば，「わたしはアフリカしかやりません」「わたしは東南アジアしかやりません」「南米しかやりません」「考古学しかやりません」「建築しかやりません」とか，みんな「なんとかしかやりません」とかばっかり言うわけです。そうじゃなくて，観光っていうのは今言ったように，ワールドワイドな課題を持っていて，逆に言うとどんなに文化が違ってもいろいろと応用できる分野でもあるわけです。

ですから，ちょっとひとつ諦めて，どんなとこでも行ってやろうと，国が，外務省が，というよりも日本政府が今，この国と強力な関係を結んでいい支援をしたいんだという意思を持っている相手国の案件があるんだったら，そこに大学としてプロとして応えようじゃないか，というのがわれわれの考え方で，それが本当の意味の国際貢献だろう，という，ちょっと偉そうな言い方で申し訳ありませんが，水の下では必死に水かき掻いているんですけど，表に出ている部分ではそういうこと言わせていただくということであります。

そして，人材育成。これは重要です。やはり言っても民間の国際協力のコンサルタントなんかはものすごいノウハウを持っています。観光という分野ではそうではなくても，それ以外のところでは僕らには及びもつかないくらいの綿密で高度な技術を持っていますから，そういうことをどんどん教えて大学ではとても学べないことを民間から学んでいくということができます。逆に，民間側もわれわれと組むことによって，うちで同じテーマで研究を進めて行って博士を取るとかね。こういう国際協力で活躍する人は高学歴の学位取得というのは非常に有効な資格になりますから，組んで信頼できる人と信頼できるプロジェクトをやって，それを研究フィールドとして論文を書いて学位を出して行くという，こういう人材育成もあります。

持続可能性というのは，大学は一応公益組織なので，金の切れ目が縁の切れ目ということはなくて，JICA 事業のお金が終わっても，われわれは必要であればその地域に支援をしていったり，あるいは，先方の地域の大学と研究協力を結んで，要するに研究レベルで協力を続けて行ったり，相手の大学にも技術移転して，その相手の大学に自分の国の地域として支援をしてもらうというようなことができる。これはやっぱり大学の取り柄だろうなというふうに考えています。

ちょっと他にも用意はしてきたんですけれども，具体的なものもお見せできればよかったんですけれど，大事だなと思うことを丁寧に説明していると時間がこの辺で来てしまいました。大変申し訳ございませんが，これで一旦，私の話しは終えさせて頂き，もしご質問等があれば頂戴したいというふうに思います。

司会者：先生，ありがとうございました。ぜひいい機会ですので，フロアの方から質問をお願いしたいところなんですけども，どなたか質問したいという人が出てきたら手を上げてください。

質問者 01：札幌大学の中山でございます。西山先生，今日は貴重なお話をありがとうございました。私もゼミのレベルで地方創生に関わり始めているのですが，非常に悪戦苦闘しています。その要因は，何かいいことをしてあげよう，よそ者らしくいいことをやってやろうと思い始めたら，必ず地域には賛成派と反対派がいて，必ず対立している。そこに割って入って，なんか良くしてあげなければならないというその苦労がなかなか突破口がなくて，結局，最終的にはお前ら邪魔だという扱いを受けることがあるんですね。そのあたり何かご指導いただければと思います。よろしくお願いいたします。

西山：それは永遠の課題ですね。二つお話ししたいです。ひとつはわたしが沖縄県の竹富島という 300 人のコミュニティに 35 年くらい今，関わっているんですけど，最初はもちろん学生で若い頃でしたから，血気盛んだし，世の中許せないことばかりみたいな感じで必死になって行きました。最初はとにかく相手にもされません。で，ちょっと相手にされるようになって，いろいろ地元の人に集まってもらって，説明とか相談会開いたりワークショップとか開いてやり出すと，今度は「なんだお前は！」と「島に住んでもいないくせに時々やって来て何を偉そうなこと言ってるんだ」と。「何も分からないのだから黙っとけ」というふうに言われる時代がまた長く続きました。で，なんでそんな悲しいことをいうんだ，僕だって本当は住んででもやりたいけど，そうもいかないわけだから。ですけど，そこで彼らが本当に相手にしなくなったらそこでおしまいですが，たぶん，そう言いながらもやっぱり，こいつが何か来るたびに違うことを，自分たちでは思いつかないことを言ったりすることにおもしろみを感じてくれて，そして 5 年 6 年と付き合ってるうちに，そしてわたしがたまたま行政の方に頼まれて地元の計画を作るお手伝いしたりし始めると，要は時間が必要なんですけど，時間が経つとだんだん地元の人たちもまぁ話が通じるようになってくるところはある。それは賛成，反対に関係なく，言っていることの意味は理解し

てくれるようになる。ただ，反対する人は当然反対するし，賛成する人は賛成する。ただ，ある瞬間，それがどういうタイミングだったかは忘れましたけど，言い方が変わったんです。島の人の言い方が。お前みたいなうるさいやつはいなくていい，と。いなくていい，と。だからときたま来いと。ときたま来るくらいがちょうどいいと。いつもいると鬱陶しいと言われて，これでやっと仲間に入れてもらえたかな，と思ったことがあります。

これはちょっと時間のかかる話でしたのであまりご参考にならなかったかもしれませんが，もう一つはエチオピアに入った時に大変なショックを受けました。今日，実はこの後のパネルにもちょっと用意はしていたんですけども，エチオピアに行って住民の方に集まっていただいて，コミュニティ・ベースド・ツーリズムでみなさんの観光の話しです，みなさんが今からこれを通じて少しずつ豊かになって行って，こうなるんです，ああなるんです，って言ったり，こっちもせっかく言ってるから一生懸命話すと，お年寄りから若いお母さんから異口同音に言われるのが，これまでもオーストリアとかいろんな国から支援が来た，と。でも，その海外のドナー，ドナーというんですね，お金をくれる人を。内臓を提供する人をドナーといいますが，そういう支援している国をドナーと呼ぶんです。いろんなドナーが来たんだけども，そいつらはともかく来たら集落の中の器用な奴だけに目を付けて，そいつらだけをピックアップして，そいつらだけにノウハウと道具を与えて，そしてそいつらだけが儲かる。儲かって金持ちになる。集落の中は貧富の差が逆に広がったり，ギスギスした軋轢が生じたりして，そんなお前たちの言ってるコミュニティ・ツーリズムなんてまったく信用しない，と。日本とオーストリアと何が違うんだ，と。一時間くらい吊し上げにあったんですね。わたしはそのときに，まったくそうだろうな，と，われわれがいくら言ったって，日本だけが特別なことをしてくれるとは，思わないだろうと。でも，その言葉の裏を読むわけですよね。やっぱりみんなで豊かになりたいという気持ちがあるから，そういう人間が妬ましかったり，そういうやり方に腹が立つ。だから，そうじゃない方法があるんじゃないかとわれわれ考えている。われわれのコミュニティ・ベースの基本的な考え方は，ともかく，みんなで相談してください，と。500 人くらいの集落なんですけど，世帯主が 150 人くらい集まってみんなで相談して代表者を自分たちで決めてくれ，と。そして，だれが直接観光客と接する接客的な仕事をするか，だれが準備の役目をするか，だれが家（場所）を提供するか，そんなことをもちろん，簡単にすぐには仕分けできませんが，そういうことを一緒に相談して行って，自分たちで全部決めてくれ，と。われわれと日頃やり取りする代表者も自分たちで決めろ。だれが観光に携わるかも自分たちで決めてくれ。とはいえ，500 人全員が観光に携わるわけではない。ほとんどの人は農

業をやっていて，ごく一部の数十人の人だけが関わるんですね。だけど，ここで儲けたお金は，もちろん，一番汗を流した人にはそれなりにお金行きますけども，基本的にはコミュニティファンド，コミュニティで財布を作ってここに入れましょう，と。一定割合ですね。たとえば 1000 円儲かったら 300 円はそのパフォーマンスした人に渡すけども，400 円は必要経費で消えるけど残りの 300 円はコミュニティのファンドに入れましょう。そしてそのお金で，みんなが一番困っている，小学校に屋根付けたいとか，溢れたら渡れなくなる川に橋を渡したいとか，ピックアップトラック 1 台買って，子供を学校に送ってあげたいとか。そういう彼らの具体的なニーズのために使えばいいのじゃないか，と。そういうふうにすれば，そんなにみんな大きなお金は儲からないけれど，少なくとも今までやったことのない観光を地域が取り組む意味があるんじゃないかという，それがわれわれが考えるコミュニティ・ツーリズムなんだと。なので，やり方はいろいろあるけども，みんなで相談してみんなが納得して，やらないという判断もあなたたちがするならすればいい。だけど，簡単に言うとやれっていう。一生懸命説明しました，何日もかけて。ですから，やっぱりコミュニティ・ツーリズムっていうのは，外から見たときに地元の人が自分で手作りでやってる観光はいいなとかそんなんじゃなくて，本当にコミュニティ全員で考えてやる観光なんです。自分たちのために。われわれはもうちょっと別の法制度とかを使いながら，そういうコミュニティが頑張って自分たちで創りだそうとしている利益を守る仕組み作りを手伝ってあげる。法制度を使ったり，日本で言うと財団を立ち上げたりするような考え方をお手伝いするようなことはしております。

すみません，ちょっと長くなりましたが，ですから，賛成派，反対派は，ぼくは反対派と直接話すというよりは，反対派も賛成派も一緒に相談してもらうと。ただ，僕らは考える材料はどんどん提供していくという形を取っているというのが現実です。ありがとうございました。

質問者 02: 先生のお話し，楽しみにしておりました。先生が今，言われた中で観光のですね，大学院ということで札幌大学の学生もぜひ行かせていただきたいなという人がいっぱいいればいいなと思いながらも，ただそこに入るためにはいろんなハードルがあると思うんですが，今，家の学生が先生の所にお世話になりたいと言ったときにどういうことを学んで行くのが一番いいのか，どんなことを一生懸命やってこいというようなことがあれば教えていただければと思います。

西山：どうもありがとうございます。それを聞いていただくと大変うれしいです。最初に申したように，いろんな大学からもいろんな専門の学生が来ていますので，まず誰でも専門分野的には問題ありません。確かに入試は語学もありますが，面接と小論文ですから，基本は。3分の1しか語学はありませんから，3分の2は面接と小論文。この小論文というのは，僕らはいくらでも事前のお手伝いをしていいことになっているんです。入試問題は教えられませんけど。だから早くわれわれの教員とコンタクトを取って，僕らが薦める本とかも一生懸命読んでもらって，論文書いたりする練習とかも一緒にしたり。やっぱりうちの先生でも，引き受けられるテーマと引き受けられないテーマがあって，それを外しちゃうと評価がどうしても難しくなってきますからね。あと面接の指導とかも結構やってます。全国から事前にコンタクトを取ってくれる。要するに僕らはお利口さんはいらない。いわゆる通知表の成績がいい人が欲しいのじゃなくて，やる気のある人，それからガッツのある，まぁやる気とガッツは一緒か。やりたいことがはっきりしているとか，根性があるとか，そして思いやりがあって，要するにこういう仕事をしていくのは人が好きじゃないと無理です。ですから，そういう人だったら一度はダメもとでもなんでもいいので，戸を叩いてください。そしたらわれわれは手作りで，注文一品生産で一人ずついろいろ対応して，お話しさせていただくことができますので。その時にはもちろん，厳しいやり取りもあるかもしれない。覚悟を確かめるために。ですから覚悟のある人には食らいつく十分なチャンスはあると思いますので。言ってもそんなに大したものは来ておりませんけど(笑)，なんて言っちゃいけないけど，まだまだうちも発展途上ですから，ぜひチャレンジしていただけたらと思います。ありがとうございました。

司会者：ありがとうございました。時間の方にもなりましたので，みなさん盛大な拍手をお願いします。ありがとうございました。